

猫 蓑 通 信

第 93号

平成 25年
(2013年)

11月 30日発行
(年 4回発行)

付句の考案プロセス

青木秀樹

このところまた連句に関心を持つ人が増えているように感じる。そのような方から、決まって良い連句入門書はありませんかと聞かれる。まったくの初心者の場合には『連句しませんか』(やまぐち連句会・中本蒼水氏編)のコピーをお渡しする程度で済ませることが出来るが、本格的に連句を楽しもうという方にとって、最もふさわしい入門書は何だろうかと迷ってしまう。連句の座を経験し、少しでも連句の呼吸のわかる初心者には、東明雅先生の『連句入門』(中公新書)をくり返し読まれるといいですよ、と

言うことにしている。

芭蕉翁の指導は『三冊子』や『去来抄』等、弟子たちの書き残したものからある程度知ることが出来るが、時により、人により、場合によって異なっているところがある。連句入門書のむずかしいところは、だれにでも共通の教則は基本段階のみであり、次のステップはその人のその人の進歩段階によって異なっていることで

ある。初めに式目をマスターしなさいと言え、たいいていの方は連句嫌いになるであろう。連句をするおもしろさは、一句一句のおもしろさ、付け転じのおもしろさ、そして作品一巻を通しての変化のおもしろさであり、付句をつなぐことにより、捌と連衆が一緒になって一巻を満尾することにある。「変化」こそが連句の文学性の中核であることは連句を楽しむ人はだれでも知っている。

以前「付けと転じ」と題して猫蓑通信第75号に書いたことであるが、連句での付句考案のプロセスは①前句を理解する(前句を読む↓句意を把握する↓打越句と前句との付け筋を読み取る↓余情を感じる)②付句を発想する(付所を見定める↓趣向を案じる↓差合いをチェックする)③句作りをする(句材を選定する↓長句・短句に仕上げ、調子を整える↓障りをチェックする)。これを極めて短い時間にこなすのが連衆の経験であり技である。

先日、『さくら草連句会作品集第八号』に掲載されていた「連句解釈の一試案」との佐藤勝明氏(和洋女子大学教授)の論作を読む機会があった。

連句の注釈が人によってなぜまちまちなのだ

●目次●

第二十三回猫蓑同人会作品 歌仙四巻

2

青蛙 棚田百選 父の日や 直刀

(当日作品のうち歌仙四巻は前号に掲載済)

第二百二十六回猫蓑例会作品 歌仙八巻

4

夏の蝶 衣裂く如く 不学老衰 夏座敷

男伊達ゆく 銀の風 雲の馬 うすものに

事務局たより

8

ろうという疑問に発し、連句の付け合いの解釈の方法を考えたことである。その方法とは①「見込み」——付句の作者は前句に対してどのような理解を示したか、また、とくにどの点に着目したか、②「趣向」——その理解や着目に基づいて、付句ではどのような場面・情景・人物像などを詠もうと考えたか、③「句作」——そのことを実際の句にまとめるにあたって、どのような材料や表現を選び取ったか、の三段階である。

これは、できるだけ客観的な解釈を心がけたという願いに発するもので、作者の脳内に展開したであろう思考活動を跡づけていく試みともいえる、と筆者は書いている。これは、まさに私たち連句人が連句の座でくり返し行っている付句考案の方法である。芭蕉作品をはじめ古典作品の評釈の事例がいくつかあるようで、現代感覚で客観的な評釈集の発表が待たれる。

2・虞美人草の座

歌仙「青蛙」

由井健 捌

都心にも小天地あり青蛙

若竹伸びる駐車場際

子供等は読書あれこれ楽しみて

粘土細工で作る人形

山の背に下弦の月のかかりたり

宿の主は茸探しに

ウ 威銃仕掛けた効果あなどれず

きつと守ると言つて得た君

マスコミにお披露目もなく籍を入れ

語学学習パリのアパート

川沿ひの公園でする太極拳

鳥の過れる冬よきの満月

たわわなる蜜柑畑の広がりに

看板用に立てる算盤

自転車でパートタイムの介護しに

チューインガムでリラックスする

花びらも舞姫と舞ふ花の屋

水琴窟をゆらす春水

ナオ 呑め歌へ高山祭りたけなはに

トロッコノロッコ旅はゆつくり

NPO赤字覚悟で協力す

解説付きの穴埋めの記事

竹床几熟考の末ほかを打つ

健

あや

志世子

吉文

啓子

未悠

啓

や

吉

啓

吉

世

悠

や

啓

吉

や

悠

世

啓

悠

や

吉

絹のすててこ肌触りよし

涼み船バスのサイズ聞いてみる

催促しても返事なかなか

猪瀬さん五輪誘致ももう一步

笑ひ男が忽とあらはれ

昇る月ベイブリッジを照らしつつ

鮭のフライをはさむバーガー

ナウ お茶会に着る秋袷縫ひ上がり

記念写真は同じ階段

笛の音の誰が吹くやら嘍嘍と

牧夫静かに搾乳の刻

蔵の町どこも絵になる花の景

初虹かかる教会の塔

連衆 中林あや 秋山志世子 永田吉文

小池啓子 棚町未悠

世

悠

世

健

や

世

啓

世

吉

世

悠

世

悠

世

悠

同

3・舞姫の座

島村暁巳 捌

頁緑る棚田百選梅雨晴間

チェリーの種の増ゆる灰皿

バグパイプ響く路上に人寄りて

からくり時計午後五時を聞く

月覗く弁柄格子果つる宴

行水名残と洒落てシャワーで

ウ 大漁の鮭を両手に氏神へ

艶歌のかかる定食の店

ヤンキーで元アイドルのママ元氣

や

悠

世

悠

世

健

や

世

悠

世

健

や

世

啓

世

吉

世

悠

世

悠

世

悠

同

こいつゲットとちよつとウインク

同居人籍を入れたら熱冷めて

買占めた後急な値下り

南座の顔見世名題勢揃ひ

ぬる爛暖る窓に凍月

チンしてもガスの調理に敵はない

ものにならない自然発電

はらはらと風呂に花片散り込んで

心静かに松蟬を聞く

ナオ 春暖暖炉鴈外全集久々に

池の端へと降りて行く道

落し物ふくれた財布交番へ

ゆとり教育見直しの声

自転車にお昼寝ふとん積みまして

業平忌とて仰ぐ尖塔

シケ込むは上の鰻重喰うてから

— あられもなくしてしかもしとやか

習さんは自慢の妻女伴つて

何とはなしに廻す地球儀

月の部屋書類の山をシュレッター

震災記念日水菓子を盛り

ナウ てきばきと介護認定爽やかに

定規をあてて引いた直線

アナログのレコード談義聞かされて

パイプの煙ぶかりぶかりと

花の雲浮かべ吉野の蔵王堂

墨絵のごとく遠い耕牛

連衆 野口明子 副島久美子 高橋豊美

西田一枝

明

枝

久

豊

久

同

久

同

明

枝

同

同

已

枝

豊

久

枝

豊

久

已

枝

同

同

1・朝焼の座

歌仙「夏の蝶」

坂本孝子 捌

ふいに来て吾を置き去る夏の蝶 孝子
 空も地平も揺らぐ炎昼 泉美
 クレッシェンド子等の歌声響くらん 郁子
 揃ひのリボン手作りで縫ひ 千恵子
 懐石膳月を見立ての卵焼 徹心
 川の町にも鳥渡る頃 節子
 西鶴忌江戸の地口を転がして 恵
 嘘がまことまことが嘘で 節
 追ひかけた彼女は何と美少年 心
 囁んだ小指はほの赤きまま 泉
 気紛れな猫は媚売ることをせず 恵
 鳥居の上に大き寒月 郁
 店閉めて母も柚子湯の終ひ風呂 泉
 ほっかり割つて分ける鰻頭 心
 健啖家なりし詩人のエピソード 恵
 百歳を超え呵呵大笑す 泉
 振り仰ぐ飛天の袖に花の舞ひ 節
 遠山並に架かる初虹 郁
 ナオ 長き日の精神科医も心病み 恵
 けふから此処が共和国です 泉
 プラカード脱原発の列続き 同
 晒す布地はまだ涙色 心
 網棚に麦藁帽の忘れ物 恵

見渡す限り向日葵の咲く
 こつそりと人の嫁御を呼び出して 泉
 男狂はず浅黒き肌 節
 テキーラに幸せの虫棲むと言ふ 恵
 房にて綴る一行の詩 心
 月光を氣息に籠めて達磨像 泉
 鯉も肥えたり馬も肥えたり 恵
 ナウ 故郷は豊作なりと佳き報せ 郁
 撥踊らせて打つや和太鼓 心
 ちよっぴりとプチ賢沢でクルーズへ 節
 名画の少女淡き礼装 郁
 花の宵皇子の誕生待ちわびて 孝
 風船売りの膨らます夢 節

2・雲海の座

歌仙「衣裂く如く」

吉田醉山 捌

連衆 金子泉美 東郁子 鈴木千恵子
 佐藤徹心 長坂節子
 向日葵や衣裂く如く飛行雲 醉山
 麦藁帽の似合ふ嬰兒 恭子
 キーボード手当たり次第叩きぬて 良子
 プリント用紙棚に積み上げ 一枝
 丸き月窓いっばいに開け放ち 昭
 糸んま蟋蟀ひそむ路地裏 山
 馬市は山を越えたる先の村 恭
 お座敷芸はあらえつさつさ 良
 家の嫁思ひもよらず鉄火肌 枝

キスとダイヤで内は安泰
 帰国までギャンブル漬のラスベガス 山
 冬の間に漢検を受け 恭
 にぎはへる終天神月高く 良
 演歌のなかに偲ぶ名人 枝
 白鵬の全勝なるか今場所も 昭
 得意としたるカレー早食ひ 山
 学舎は右も左も花の門 恭
 陽炎立ちて揺れる煙突 良

ナオ 巢ごもりの親を呼ばはる声のして 枝
 ボニー調教ぐるり円描く 昭
 駅前でひと寄せをする元首相 山
 電話の音の途切れては鳴り 恭
 エルドラドへバックパッカー登りゆく 良
 赤海亀に乗った少年 枝
 夏風邪を移され移す仲となり 昭
 お酒のせいね迫る求婚 山
 ぬひぐるみばかり集めた小さき部屋 恭
 臆病ものは俺様と言ひ 良
 ボヘミアン月に魂預けたる 枝
 切れぬ包丁固き南瓜なぐさ 昭
 ナウ 秋扇閉ぢて静かに能を舞ふ 山
 いつもの夢は幸せの刻 恭
 励まねば老い衰ふと菅丈の書 良
 団地すつかり皆のふるさと 枝
 花一樹訪へば名に負ふ気品あり 山
 散歩途中に拾ふ紅貝 昭
 連衆 式田恭子 本屋良子 西田一枝
 松原昭

5・赤星の座

歌仙「男伊達ゆく」 鈴木美奈子 捌

川風や男伊達ゆく夏祭 美奈子

溽暑に堪ふる藍浴衣よし 路子

連れ立ちてアンテナショップ冷かしの 土郎

お国訛りのやたら飛び交ふ 霞

長距離を夜通し運転窓の月 富子

山の端かすめ渡る雁 士

ウ 色深し野に在りてこそ吾亦紅 霞

片急くぼあの忘れ得ぬひと 路

おだてれば手作りランチ職場まで 富

返信メールOKと書く 同

子育てはおまかせと言ふ皇太子 路

逆さ卍の靡く伯林 士

雪原の月を残して退却す 路

霜焼の足痒くなる頃 霞

梳櫛も昭和資料と展示され 奈

箸の持ち方孫に特訓 富

三十年紹興酒空け花の下 士

さても蛙の目借り時とは 霞

ナオ 春讀へボーイソプラノ清らかに 路

空に聳ゆる教会の塔 士

谷根千の江戸っ子だつてねえ穴子鮓 路

文豪の住む坂多き町 霞

昼さがり研ぎ屋の爺が店を出し 富

霞 思ひ思ひのフリルコサージュ
君を抱くエナメル靴ときめきて
枕に残る甘き移り香 路

富 柚子湯して湿布三枚貼りてをり
アベノリスクの嘘も方便 奈

霞 太りゆく上弦に夢託したる
蜂の仔取りに駈ける里山 富

士 ナウそぞろ寒彼の四島を見はるかす
方舟乗りし祖の有りて我 路

霞 講堂に仕合せ祈る数珠回し
子猫眠れる土間の片隅 士

奈 咲き初むる花のつぶやきピアニシモ
朝のサラダに添へるクレソン 富

連衆 倉本路子 横井士郎 高塚霞
名古屋富子

6・喜雨の座
歌仙「銀の風」 山口美恵 捌

美恵 ヴィンソワーズ唇に涼しき銀の風
麻の卓布にぴんと糊付 アンズ

央子 宿題を終へたこどもは飛び出して
大きなボール砂浜で蹴る 佐紀子

健 椰子の葉の影にぼっかり望の月
村芝居にて酋長の役 健

央 ひとときを盛りあげてまづ猿酒
軽い一言ひよんなご縁に 健

央 安売りをしないわたしのテクニク
由井健

同 回転木馬に揺れてゐるだけ
比叡山阿闍梨をめざす修行僧 健

佐 沢音高く悴んだ月
夜鳴蕎麦腹の虫鳴る頃合に 健

ア のつべらぼうと友達になる
露天ふる海のほとりで鉢合はせ 佐

央 サブマリンひっそりと過ぎ
花を追ひ本州縦断老の旅 同

佐 ナオ春シヨール草間彌生の水玉で
朝寝据膳ほしいままなる 同

健 るす番がちの犬銭つ禿
判子下さい魔女の宅配便が来た 健

央 急須で入れるお茶をしみじみ
ちようちんを棧敷に並べ川床料理 健

ア 短めが粋藍の羅
カーナビで恋の迷路に迷ひ込み 健

ア ピアスとピアスからむ抱擁
道端の聖母の像に十字切り 恵

同 西洋美術館は行列
織月のかげらを乗せて流れ雲 同

央 名残の茶事の一杓のよき
ナウ 菊人形作り手に似て細面 佐

央 カラオケ爺マイク離さず
大字に同じ苗字の詣り墓 恵

ア 個体番号つけた蝶々
ダライラマ花の盛りに生れ給ふ 恵

健 海女の磯笛波のまにまに
連衆 松島アンズ 遠藤央子 間佐紀子
由井健

7・夕風の座
歌仙「雲の馬」

中林あや 捌

炎帝の乗るやら気負ふ雲の馬 あや
 のうぜんかつら咲き盛りをり 淳子
 現代史構想を練る別荘に 吉文
 修理が終る水道の漏れ 鄭和
 満月へ届けと歌ふコーラス部 志世子
 早も出でしは細き新語 淳
 秋遍路交はず笑顔の美しく 世
 ひたむきに彫る目つむりの木偶 和
 起こさずにそつと帰らう鍵かけて 淳
 伝言板に残すイニシャル 吉
 機嫌よく家事にいそしむ昨日今日 世
 ふろふき大根ふつくらと月 淳
 安倍総理にんまりとする掘炬燵 吉
 週刊誌なぞ見出しだけ読む や
 定年後パチンコ競輪はまり込み 淳
 かすかにそよぐ川端の草 世
 花の宴高橋潜る屋形船 和
 六つの春から習ふ三味線 淳
 ナオ 近頃は猫少なくて暮遅し 和
 あつといふ間の「すぐやる課」あり 吉
 スコップや鋤鍬ホース皆揃へ 淳
 江戸の錦絵ほくのアイテム 吉
 お仕置きをしてほしいなら薔薇の鞭 和

平成二十五年七月十七日
於 江東区芭蕉記念館

汗と涙の睦言の果て

大陸の砂漠拡がるばかりとか
旅のプランは保険たっぷり

設計図書くが道楽田舎医者
いつもここにちやんちゃんこ着る

月皓皓五輪誘致も後一步
離宮の窓ももうす紅葉して

ナウ 蛤と成る小雀を飼ひ馴らす
オセロゲームは兄に勝てない

マツコリで朝までねばる長つ尻
夢に辿るは故郷の山

散りながら花びらきらり光りけり
生まれたてらし白き蝶々

連衆 上月淳子 永田吉文 高山鄭和
秋山志世子

8・海霧の座
歌仙「うすものに」

うすものに風立つ朝の雲の波
ありとしもなく縷紅草揺れ

自鳴琴開いたままに置かれみて
カウチへそつと猫を呼び寄せ

豊穰の今宵名月仰ぎたる
剥いてくれろと衣被出し

漸寒の英語教師はインド人
ルビーの指輪光る窓際

好色のDNAは裏切らず

久 民 同 義 敦子 遊民 常義 久美子 了斎

完全無欠の濡場演ずる
戀と書く漢字筆順背を正し

木魚の絶え間虎落笛哭く
柅の挿さるる門辺月の影

白磁の壺は眉に唾せよ
コンタクトレンズなくした洋便器

海をめざせる旅のはるけき
語り継ぐ一家の歴史花の宵

春蚕さわさわ桑を食む音
ナオ 搔掘の諸子ばかりもつまらなく

煙草のけむりうまく輪になる
駅前の電光ニュースいつまでも

DJポリス粋な誘導
声もよし顔またよしと囃しをり

ものの気配のよぎる真夜中
覗き穴母の逢瀬に息つめて

千筋の髪が肩にからまる
探偵のちらし捨てずにとつておき

柱時計のぼんと打つ音
月の舟水に浮かべば散りぢりに

夜業の後に啜るコーヒー
ナウしみじみと機械油の香にも秋

うからやからの顔が次々
砂に生き砂に埋もれる楼蘭は

エンディングノート未だまつさら
降る花に佇めば身の浮くごとし

囀の庭走る字童

久 民 同 義 敦子 遊民 常義 久美子 了斎 敦

連衆 副島久美子 生田目常義 内田遊民 武井敦子

●平成二十五年猫養会総会が開催されました

七月十八日(水曜日)、江東区芭蕉記念館にて平成二十五年猫養会総会(第百二十二回例会)が開催されました。議事ののち、八卓にわかれて歌仙を興行し、全席披露ののち、午後五時に閉会しました。当日の歌仙八巻は、今号のp6～p9に掲載しています。

●平成二十五年芭蕉忌正式俳諧・明雅忌興行が開催されました

十月十六日(水曜日)、江東区芭蕉記念館にて、平成二十五年芭蕉忌正式俳諧・明雅忌源心興行が開催されました。正式俳諧の詳細、及び源心作品は次号(第九四号)に掲載します。

●今後の予定

・平成二十六年初懐紙(第百二十八回例会)
一月十九日(日曜日)
十二時～十七時(受付十一時より)
於 ホテルフロラシオン青山

・平成二十六年藤祭正式俳諧(第百二十九回例会)
平成二十六年四月二十五日頃 於 亀戸天神社

●猫養基金にご協力ありがとうございました

・山寺たつみ様 平成二十五年七月 五千元
・匿名 平成二十五年七月 二万円

●訃報

・元会員の竹田登代子様が、この四月にご逝去され

ました。謹んでご冥福を祈ります。
・会員の佐藤順亭様(新潟県小千谷市)がご逝去されました。謹んでご冥福を祈ります。

●受賞

・南砺市いなみ全国連句大会2013
浪化賞
石川葵 捌 歌仙「寒椿」の巻
浪化賞

・第28回山梨国民文化祭芸芸祭「連句の祭典」
山梨県教育委員会教育長賞
奥野美友紀 捌 歌仙「寒椿古」の巻

・上記三作品は次号(第九十四号)に掲載予定です。
鈴木了斎 捌 半歌仙「咲くやうに」の巻

●新体制

・会長 青木秀樹
・副会長 鈴木了斎(広報担当)
・理事 橘 文字
式田恭子(事務局担当)

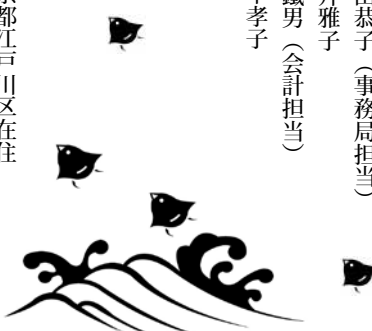
・同人会長 坂本孝子
林鐵男(会計担当)

●新同人

・高塚 霞
・由井 健

●新会員

・御園魚彦 東京都江戸川区在住
・宇田川清 東京都板橋区在住
・田所照子 東京都杉並区在住
・田中秀夫 東京都江戸川区在住



・功刀太郎 山梨県笛吹市在住
・高瀬英二 横浜市栄区在住

●転居

・橘文字 東京都江東区へ移転
・鈴木了斎 横浜市都筑区内移転(電話は変わらず)
・内田遊民 東京都文京区内移転

●猫養作品集について

今年七月に猫養作品集第二十二巻を刊行しましたが、以後は隔年刊行を予定しています。従って、来年は作品集を刊行しません。第二十三巻以降の作品集の体裁、編集体制等については改めて検討し、決まり次第発表します。

●猫養通信今号の発行遅延について

今号は、都合により、例年の秋季発行号より大幅に発行時期が遅れ、減ページでの発行となりました。次号以降は、通常の十二または十六ページで三ヶ月ごとの季刊発行に戻すことができる予定です。次号第九四号は、通常の新春号と同じく、一月十五日発行の予定です。

季刊 『猫養通信』第九三号

平成二十五年十一月三十日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイート株式会社